

高校教師の生徒指導の一考察

—進路指導・部活動の負担と教師の使命感を焦点として—

A Study about Student Guidance of High School Teachers:
Focusing on Burden of Career Guidance Club Activities and Teachers' Sense of Mission

中 西 啓 喜
(Hiroki, NAKANISHI)

1. 問題関心

日本の教師の多忙化が問題視されて久しい。よく知られていることだが、日本の教師（特に中学校と高校）の多忙さは、授業時間以外の生徒指導、進路指導、部活動などの負担に特徴づけられる。2013年の国際調査「国際教員指導環境調査」（TALIS）においては、1週間の勤務時間は加盟国平均の38.3時間に対し、日本は53.9時間で最長であった。特筆すべきは、授業とその準備などに費やす時間は他国とほぼ同程度である一方で、部活など課外活動指導が7.7時間（平均2.1時間）、事務作業5.5時間（平均2.9時間）など、授業以外に費やす時間に教師が追われていることが明らかにされ報じられた⁽¹⁾。

とりわけ、最近では教師の部活動による負担が問題視されつつある。部活動は、生徒にとっては相対的に小さな金銭的負担でスポーツなどに打ち込めるわけだが、それらは教師の犠牲のうえで成り立っているという側面がある（内田 2017a）。

また、高校教師に求められる役割としては、キャリア教育ないし進路指導も大きい。とりわけ、日本の高校は地域内で競争的な構造をなしているため、教師が高校の進路実績を向上させるための役割を求められるという側面もある。

上記以外にも教師の多忙さは、職務に求められる際限の無さにある。例えば、学習面の理解が遅れている生徒には補習を行うべき、生活で問題を抱える生徒のサポートをすべき、生徒の立場によりそうべき、生徒の将来の幸福を願うべき…といった教職特有の規範的な価値がある。このような「～すべき」を内面化した教師の認知的枠組みのひとつとして、ビリーフ（Belief）という心理学的な概念がある。人が感情を持ったり行動を起こしたりする際の思考様式のことであり、「～ねばならない」というような絶対的・教義的な類の強迫的なビリーフは、イラショナル・ビリーフ（Irrational Belief）と呼ばれる（河村・田上 1997）。そして、イラショナル・ビリーフは、教師のストレスないしバーンアウト（燃え尽き）の原因として考えられる。

そこで本稿では、部活動の負担と教師の使命感といった心理的側面を焦点として高校教師のストレスを分析することにより、生徒指導の在り方について検討してみたい。

2. データと変数

2.1. 調査の概要

本稿で用いるのは、2009年の11月頃に東北地方 α 県、中部地方 β 県の2エリアにおいて高校教師を対象に実施した質問紙調査から得られたデータである。調査協力が得られ分析対象となるのは33校（ α 県=10校、 β 県=23校）である。調査の詳細については、樋田ほか編著（2011a、2011b、2014）を参照されたい。

調査対象校の内訳であるが、設置者は29校が公立高校、4校が私立高校である。職業系専門科の高校は7校（工業3校、商業3校、農業1校）である⁽²⁾。本稿での分析ケース数は1317人である⁽³⁾。

2.2. 変数について

本稿では、高校教師のストレスについて分析していく。従属変数は、「仕事上で強いストレスを感じる」という質問項目に対する回答（4件法）を連続変数とみなして用いる。

独立変数は、生徒指導の側面と教師ビリーフの両側面について検討する。生徒指導については、「成績の下がった生徒は個別に呼んで話を聞く」、「保護者からの要望に丁寧に応じる」、「保護者からの理不尽な要望を突き付けられる」、「部活動の多くは、学校ではなく地域団体などに引き受けてもらってもよい」、「学校の進路実績を上げることは大切だ」の各質問項目に対する回答（4件法）を用いる。また、教師ビリーフについては、「教師としての力を高めるために自分は学び続けている」、「教師は、使命感がなければやっていけない仕事である」に対する回答（4件法）をそれぞれ

表1. 使用変数の記述統計量

	Mean	S.D.	Min.	Max.
従属変数				
仕事上で強いストレスを感じる	2.68	0.82	1.00	4.00
独立変数				
性別				
男性ダミー	0.63	0.48	0.00	1.00
学級担任か否か				
学級担任ダミー	0.35	0.48	0.00	1.00
年齢				
20代	0.07	0.26	0.00	1.00
30代	0.16	0.36	0.00	1.00
40代	0.40	0.49	0.00	1.00
50代	0.30	0.46	0.00	1.00
60代以上	0.06	0.23	0.00	1.00
生徒指導				
成績の下がった生徒は個別に呼んで話を聞く	2.72	0.74	1.00	4.00
保護者からの要望に丁寧に応じる	2.96	0.79	1.00	4.00
保護者からの理不尽な要望を突き付けられる	1.91	0.73	1.00	4.00
部活動は地域団体などに引き受けてもらってもよい	2.72	0.91	1.00	4.00
学校の進路実績を上げることは大切だ	2.99	0.66	1.00	4.00
教師ビリーフ				
教師としての力を高めるために自分は学び続けている	3.01	0.62	1.00	4.00
教師は、使命感がなければやっていけない仕事である	3.24	0.69	1.00	4.00

用いる。

上記に加え、統制変数として、教師の性別、学級担任か否か、校務分掌、年齢を用いる。使用変数の詳細については、表1にまとめた通りである。

3. 分析

3.1. 相関係数による検討

ここでは、多変量解析に先立って変数間の相関係数を確認しておこう。列①を見ると、教師ストレスと各変数間の相関関係が把握できる。まず生徒指導の側面について見ると、「成績の下がった生徒は個別に呼んで話を聞く」、「保護者からの要望に丁寧に応じる」、「保護者からの理不尽な要望を突き付けられる」、「部活動の多くは、学校ではなく地域団体などに引き受けてもらってもよい」のそれぞれがプラスに相関していることがわかる。換言すれば、生徒対応、保護者対応を丁寧に行う教師ほどストレスを感じやすいということである。教師ビリーフの側面については、「教師は、使命感がなければやっていけない仕事である」と考えている教師ほどストレスを感じていることがわかる。

一方で、「教師は、使命感がなければやっていけない仕事である」という教師ビリーフについて、行⑧を見てみよう。すると、「成績の下がった生徒は個別に呼んで話を聞く」、「保護者からの要望に丁寧に応じる」、「保護者からの理不尽な要望を突き付けられる」、「学校の進路実績を上げることは大切だ」という生徒指導の側面とプラスに相関していることがわかる。こうした相関関係から、生徒指導への使命感と教師ビリーフも相関していることがわかる。

表2. 教師ストレスの相関係数

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
① 仕事上で強いストレスを感じる	—						
生徒指導							
② 成績の下がった生徒は個別に呼んで話を聞く	0.102 ***	—					
③ 保護者からの要望に丁寧に応じる	0.090 **	0.473 ***	—				
④ 保護者からの理不尽な要望を突き付けられる	0.174 ***	0.244 ***	0.307 ***	—			
⑤ 部活動は地域団体などに引き受けてもらってもよい	0.121 ***	0.100 ***	0.088 **	0.097 ***	—		
⑥ 学校の進路実績を上げることは大切だ	-0.036	0.096 ***	0.119 ***	0.046	-0.036	—	
教師ビリーフ							
⑦ 教師としての力を高めるために自分は学び続けている	-0.001	0.163 ***	0.160 ***	0.025	0.014	0.175 ***	—
⑧ 教師は、使命感がなければやっていけない仕事である	0.117 ***	0.101 ***	0.079 **	0.020	0.011	0.126 ***	0.229 ***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

3.2. 多変量解析による分析結果

それでは多変量解析によって教師ストレスの規定要因を分析していこう。表3は教師ストレスを従属変数に設定した重回帰分析の結果である。モデル1は、教師の性別、年齢、学級担任か否か、校務分掌という変数によってのみを独立変数に投入した結果である。統計的に有意な変数は、年齢のみである。20代を基準カテゴリーとして、30代、40代がプラスに有意であるため、相対的に若い教師よりも中堅教員の方がストレスを感じていることがわかる。

そして、モデル2は生徒指導と教師ビリーフの各変数を投入したモデルである⁽³⁾。生徒指導の側面については、「保護者からの理不尽な要望を突き付けられる」と「部活動の多くは、学校ではなく地域団体などに引き受けてもらってもよい」が0.1%水準でプラスに有意である。「部活動の多くは、学校ではなく地域団体などに引き受けてもらってもよい」がプラスに有意であるということは、実態として部活動を学校で負担しているため、教師のストレスと関連していることが示唆されよう。一方で、「学校の進路実績を上げることは大切だ」が有意ではない。これらのことは、教師のストレスが進路指導よりも生活に関わる側面で形成されていることが示唆される。

教師ビリーフの側面については、「教師は、使命感がなければやっていけない仕事である」もまた0.1%水準でプラスに有意である。この質問項目がストレスを高めているということは、教師の使命感はイラショナル・ビリーフとして機能してしまっているのかもしれない。

また、モデル1で有意であった教師の年齢はモデル2では有意ではなくなっているため、教師ストレスについて、年齢は生徒指導や教師ビリーフによる疑似的な相関関係であったことが伺える。

以上より、教師のストレスの規定要因は、学級担任か否か、校務分掌といった組織的な側面よりも、生徒指導における負担や教師ビリーフといった個人化された心理的なメカニズムによるものだということがわかる⁽⁵⁾。

表3. 教師ストレスの規定要因（重回帰分析）

	<i>Model 1</i>			<i>Model 2</i>		
	B	S.E.	β	B	S.E.	β
性別（ref. 女性）						
男性	-0.060	0.047	-0.035	-0.084	0.049	-0.048
年齢（ref.20代）						
30代	0.254	0.088	0.112 **	0.133	0.091	0.060
40代	0.179	0.073	0.107 *	0.068	0.079	0.041
50代以上	0.169	0.074	0.094 *	0.028	0.083	0.016
学級担任	0.081	0.052	0.047	0.023	0.056	0.013
校務分掌（ref. 教務）						
進路指導	0.095	0.065	0.041	0.045	0.067	0.019
生徒指導	0.057	0.065	0.025	0.039	0.066	0.017
成績の下がった生徒は個別に呼んで話を聞く		—		0.045	0.037	0.040
保護者からの要望に丁寧に応じる		—		0.013	0.036	0.013
保護者からの理不尽な要望を突き付けられる		—		0.169	0.034	0.150 ***
部活動は地域団体などに引き受けてもらってもよい		—		0.090	0.026	0.100 ***
学校の進路実績を上げることは大切だ		—		-0.059	0.036	-0.047
教師としての力を高めるために自分は学び続けている		—		-0.036	0.039	-0.028
教師は、使命感がなければやっていけない仕事である		—		0.139	0.035	0.117 ***
定数	2.505	0.070 ***		1.764	0.196 ***	
F 値		2.991 **			6.222 ***	
R ² 乗値		0.011			0.058	

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

4. まとめ

ここまで、高校教師のストレスについて、生徒指導と教師ビリーフに注目して分析を行ってきた。本稿の分析より得られた分析結果は以下のようにまとめることができる。

第一に、生徒指導の側面については、「保護者からの理不尽な要望を突き付けられる」と「部活動の多くは、学校ではなく地域団体などに引き受けてもらってもよい」という側面が教師ストレスを高めていた。これら2つの変数が有意だったということは、教師は生徒対応だけでなく保護者対応という両面からストレスを感じているということになる。

第二に、進路指導としての「学校の進路実績を上げることは大切だ」が有意ではなかった。第一の結果とも勘案すれば、高校教師は、生徒の進路指導に対してはそれほど大きなストレスを感じておらず、生徒の生活サポートの側面の方がストレスを感じやすいことが示唆される。

第三に、教師ビリーフの側面については、「教師は、使命感がなければやっていけない仕事である」と考えている高校教師ほどストレスを高めていた。この結果が示唆するのは、教師の使命感がイラショナル・ビリーフとして機能してしまっているのかもしれない。

ただし、教師の職務の際限の無さは、「教師の犠牲」という側面がある一方で、教師が指導することに「ハマっている」という側面もある（内田 2017a、2017b）。意欲的な生徒に接する瞬間は教師としての幸福であるし、「もっと指導すれば、もっと伸びてくれる」と思えば、教師は指導することに「ハマって」いくことになる。とりわけ部活動は、例えば元野球部員の教師が野球部の監督（顧問）を担当するなど、教師自身の「美しい」青春の思い出とも合わさることにより、「楽しいからハマる」という側面がどうしても避けられない（内田 2017a、2017b）。

このような観点からすれば、日本の教師の多忙化は簡単に議論することが難しいことがわかる。しかし、本稿では少なくとも、部活動の負担と教師の使命感が高校教師のストレスを高めているということを示すことができた。

付記

本稿で用いたデータは、JSPS 科研費（21330193）、平成21-23年度科学研究費・基盤（B）「高校生文化と進路形成の変容（第3次調査）：単線型教育体系における多様化政策の課題」

（研究代表：樋田大二郎）の助成を受けて収集された。データの利用について快諾いただいた研究会メンバーに記して感謝申し上げたい。

〈注〉

- （1） HUFFPOST「日本の先生、勤務時間は世界最長 授業外で多忙、一方で低い自己評価」（2014年06月26日 21時01分）http://www.huffingtonpost.jp/2014/06/26/teacher-oecd_n_5532451.html、2017年11月30日取得。データの詳細については、図1を参照のこと。
- （2） 普通科に分類した1校のみが1クラス商業科を併設しているが、大部分は普通科クラスであるためこ

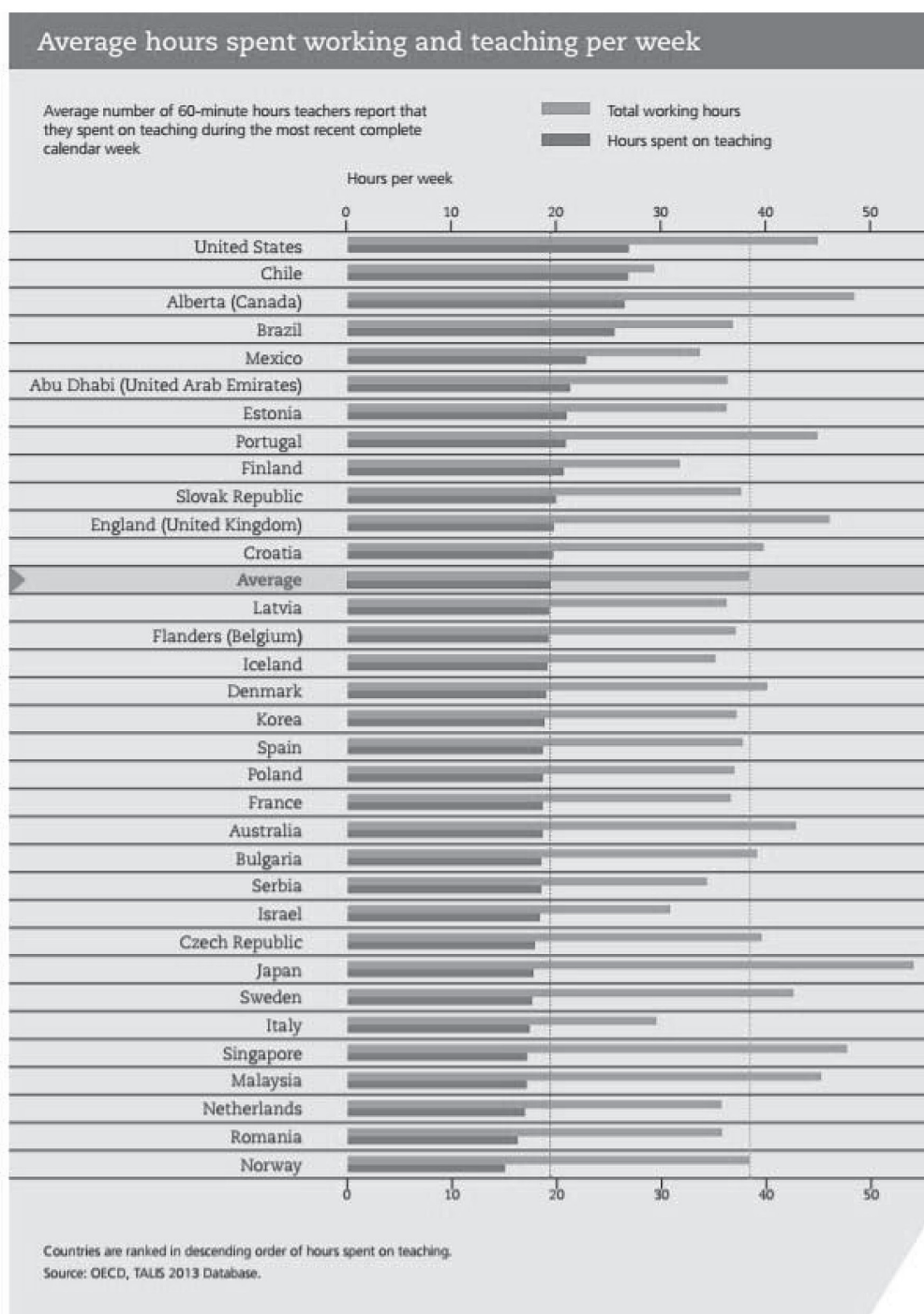
ここでは専門校としてカウントしていない。

- (3) 無回答はリストワイズに削除して分析する。
- (4) 生徒指導、教師ビリーフについての独立変数間の多重共線性診断の結果は、VIF (Variance Inflation Factor) は1.0~1.4であったため許容範囲だと判断した。
- (5) 高校ランクの変数も投入したが、分析結果にはほとんど影響がなかった。

〈引用文献〉

- 樋田大二郎・中西啓喜・岩木秀夫、2011a、「単線型メリトクラシーパラダイムの再考 (I) —「高校生文化と進路形成の変容 (第3次調査)」より」『青山学院大学教育人間科学部紀要』第2号、pp.1-22。
- 樋田大二郎・大多和直樹・金子真理子・岡部悟志・堀健志、2011b、「単線型メリトクラシーパラダイムの再考 (II) —「高校生文化と進路形成の変容 (第3次調査)」より」『青山学院大学教育人間科学部紀要』第2号、pp.23-44。
- 樋田大二郎・荻谷剛彦・堀健志・大多和直樹、2014、『現代高校生の学習と進路—高校の「常識」はどう変わってきたか?』学事出版。
- 河村茂雄・田上不二夫、1997、「教師の教育実践に関するビリーフの強迫性と児童のスクール・モラルとの関係」『教育心理学研究』第45集2号、pp.213-219。
- OECD, 2013, *A Teachers' Guide to TALIS 2013*.
- 内田良、2017a、『ブラック部活動—子どもと先生の苦しみに向き合う』東洋館出版社。
- 内田良、2017b、「子どもの安全・安心を脅かす『教育』」片山悠樹・内田良・古田和久・牧野智和『半径5メートルからの教育社会学』大月書店、pp.155-170。

図1. 各国の1週間の勤務時間と授業時間



出所：OECD（2013）、p.9